

## はじめに

『和漢朗詠集』は藤原公任（九六六一—一〇四一）により撰集されたアンソロジーである。巻上（春・夏・秋・冬）、巻下（雜）から成る。百余りに部類分けされ、その中でそれぞれに立てられた題のもと、漢詩文・和歌等が採録されている。それらは中国、日本の詩文、和歌等の順に収められている。漢詩文・和歌の同列化はそれまでのアンソロジーには見られないことであつた。漢字・仮名表記の併存によつて本作品の諸伝本は書の内容・手本としても重んじられ、成立直後から頻りに書写されたことと推察される。また、他の文学作品への本作品の引用状況から『和漢朗詠集』所収の作品は当時、人口に膾炙するものが少なくなかつたであろうことが推測される。

現存する平安時代の書写とされる『和漢朗詠集』諸伝本の数は、いわゆる完本に古筆切（断簡）を合わせると三〇余种に上る。十一世紀中葉の書写とされる伝本も現存している。それらは『和漢朗詠集』の成立以降、数十年程後に書写されたと推され、いずれも公任原撰本を探る上で貴重な資料であることは言うまでもない。そこには当代随一の能書家の手になるものもある。

『和漢朗詠集』の出典たるもののうち、中国にも日本にも散逸している作品があるということは既に先学のご指摘の通りである。その点においても学術的に活用し得る側面を有し、文学・書を研究する上でその資料的価値は極めて高い（山田孝雄氏著『倭漢朗詠集』〔昭和7年 岩波書店、佐藤道生・柳澤良一両氏著『和歌文学大系』47〔平成23年 明治書院〕他。鎌倉時代以降、諸伝本はさらに夥しい数に上る。需要の高さが窺われ、『和漢朗詠集』は当代、及び後代、多大な影響を与えた重要な作品であるといえる。

平安時代の書写とされる『和漢朗詠集』諸伝本の関係について、かつて、堀部正二氏は主に本文の面から三種に分類され、<sup>（注1）</sup>また、久曾神昇氏は、主に形態的な面から二大別された。<sup>（注2）</sup>

その後、小松茂美氏著『古筆学大成』等の刊行による古筆切の資料公開がなされ、当時に比してより踏み込んだ調査・研究が可能な環境となった。しかしながら、同作品の諸伝本について、その資料の網羅的集成が成されたのは昭和一四年刊行の『傳藤原定頼筆和漢朗詠集山城切解説及釈文』<sup>(注3)</sup>の一冊に止まる。三木雅博氏も『和漢朗詠集』の本文の問題は、従来の研究史ではほとんど取り上げられず、わずかに堀部正二氏の『和漢朗詠集山城切』の〈解説及釈文〉で基礎的な調査に着手されたまま、その後再び手つかずになっている感がある」(同氏著『和漢朗詠集とその享受』[平成7年 勉誠社])と述べられた通り、本作品の諸伝本について、系統論はまだ確立されていない(『日本古典文学大辞典簡約版』昭和61年 岩波書店)の「和漢朗詠集」の項。「和漢朗詠集の伝本についての研究は従来ほとんど行われていないといつてよい」(『新編国歌大観』「和漢朗詠集」の解題)ともされ、その後も諸伝本の性格を明らかにし、系統立てる試みは殆ど行われていないといえよう。

本作品の成り立ちを考える上でも、また、撰者である公任原撰本の実相を辿り、諸伝本の本文変遷の諸相を掴むためにも現存する資料を基に分類する試みは基礎研究として不可欠のことである。

本書では、如上の堀部・久曾神両氏のご論に扱われなかった若干の資料をも調査し得たことから改めて平安時代の書写とされる諸伝本に関する先学の研究について検討を行った。それに基づき形態・本文、及び書の面から諸伝本の相互関係について考察を行い、諸伝本の系統立てを試みるものである。

\* \* \*

以下、凡例を示す。

一、書写年代を平安時代に限定して調査した諸伝本・断簡の概要は次の通りである。特に断りのない限り、掲載順・引用の  
 出典等(略号・略称は除く)は『古筆学大成』第一三・一四・一五巻[平成2年 講談社]に拠った。

二、『和漢朗詠集』の当該詩歌句を番号で示すことがある。その番号は『新編国歌大観』に拠った。

書名	略号	出典
大字和漢朗詠集切	行大	『古筆学大成』(平2) 講談社
雲紙本和漢朗詠集	雲	『古筆学大成』(平2) 講談社
関戸本和漢朗詠集切	関戸本	複製本 『古筆学大成』(大8) 繁礎堂
雲紙本和漢朗詠集切	雲切	複製本 『古筆学大成』(平2) 講談社
粘葉本和漢朗詠集	粘	複製本 『古筆学大成』(明41) 審美書院
近衛本和漢朗詠集	近	『古筆学大成』(平2) 講談社
法輪寺切本和漢朗詠集	法	法輪寺切 『古筆学大成』(平2) 講談社
伊予切本和漢朗詠集	伊	伊予切 『日本名跡叢刊』(昭56) 二玄社
久松切本和漢朗詠集	久	久松切 複製本 『出光美術館藏』(昭35) 便利堂
安宅切本和漢朗詠集	安	安宅切 『古筆学大成』(平2) 講談社
金銀砂子切本和漢朗詠集	行金	『古筆学大成』(平2) 講談社
唐紙本和漢朗詠集切	唐	『古筆学大成』(平2) 講談社
唐紙本和漢朗詠集	唐1	『古筆学大成』(平2) 講談社
卷子本和漢朗詠集	卷	『古筆学大成』(平2) 講談社
太田切本和漢朗詠集	太	複製本 『古筆学大成』(昭7) 尚古会
益田本和漢朗詠集切	益	『古筆学大成』(平2) 講談社
大内切本和漢朗詠集	大内	『古筆学大成』(平2) 講談社
下絵和漢朗詠集切	下	下絵切 『古筆学大成』(平2) 講談社
散書和漢朗詠集切	散	散書切 『古筆学大成』(平2) 講談社
和漢朗詠集切(一)	和1	『古筆学大成』(平2) 講談社
和漢朗詠集切(二)	和2	『古筆学大成』(平2) 講談社
和漢朗詠集切(三)	和3	『古筆学大成』(平2) 講談社
金銀切箔切本和漢朗詠集	定金	『古筆学大成』(平2) 講談社
山城切本和漢朗詠集	山	複製本 『古筆学大成』(昭14) 里見忠三郎
大字和漢朗詠集切(一)	俊大1	『古筆学大成』(平2) 講談社
大字和漢朗詠集切(二)	俊大2	『古筆学大成』(平2) 講談社
和漢朗詠集切	俊和	『古筆学大成』(平2) 講談社
多賀切本和漢朗詠集	多	多賀切 『古筆学大成』(平2) 講談社
大宇和漢朗詠集切	大	『古筆学大成』(平2) 講談社
多賀切本和漢朗詠集切	多	多賀切 『古筆学大成』(平2) 講談社
藤原定信筆	藤原	『古筆学大成』(平2) 講談社
藤原定信筆	藤原	『古筆学大成』(平2) 講談社
藤原伊行筆	藤原	『古筆学大成』(昭3) 尚古会
藤原伊行筆	藤原	『古筆学大成』(昭3) 尚古会
藤原伊経筆	藤原	『古筆学大成』(昭3) 尚古会
和漢朗詠集切	伊和	複製本 『古筆学大成』(平2) 講談社

三、異同調査の際、異体字・略字等について、また、和歌では漢字と仮名との違い、仮名遣いの違い等について異同とは見做さないこととした。また、ここでは後人による改竄かと思しき文字、剥落等のため判読不可能な文字、同筆と認められない文字等については原則、対象外とした。翻字の際はその殆どを通行の字体に改めた。

四、注記等の文字が虫損等により不明な場合は翻字の際、その部分を□で示した。

五、本書中、指摘する本作品『和漢朗詠集』の各部の呼称、及びその概要については以下の通りである。

諸伝本のうち、巻上・下の冒頭に「目錄」を有するものがある。「目錄」とは「題」の一覧を仮称するものである。

巻上の部類名は「春」・「夏」・「秋」・「冬」により構成されており、巻下では巻頭に「雜」とのみ書されている。

本書における「題」とは部類分けされた各詩歌句群それぞれの項目名を指す。「題」には、たとえば「子日付若菜」における「若菜」のごとく、小字にて付加事項が書されていることもある。それらを便宜上、「付項目」と呼称する。

当該詩歌句に関する題詞・作者名等がその末尾（行末）に小書きされている場合がある。それらを「注記」と仮称する。

六、前述した堀部・久曾神両氏の分類(1)・(2)・(3)、**甲類**・**乙類**のうちの(1)・**乙類**(粘葉本・伊予切)を粘葉本類、(2)・

**甲類**(雲紙本・関戸本)を雲紙本類と以下、呼称する。

## 注

(1) 伊藤壽一・堀部正三両氏編『傳藤原定頼筆和漢朗詠集山城切解説及釋文』〔昭和14年 里見忠三郎氏〕P 38・39

(2) 久曾神昇氏著『仮名古筆の内容的研究』〔昭和55年 ひたく書房〕P 197

(3) 前掲(注1)に同。片桐洋一氏により同書は、堀部正三氏編著『校異和漢朗詠集』〔昭和56年 大学堂書店〕として復刻された。本書中、同書を引用する際は、その『校異和漢朗詠集』の方に拠った。